

加藤祐三 著
「軽石—海底火山からのメッセージ」について

藤 縄 明 彦*

Book Review: Pumice: Messages from submarine volcanoes by Yuzo KATO

Akihiko FUJINAWA*

本書の底流を流れるものは、岩石学者である著者の抱く、軽石へのこよなき愛情であろう。「好きこそものの…」ではないが、著者の軽石への想いが、読むものをどんどん「加藤ワールド」に引き込んでいく。

本書は10章より成り、海岸に漂着した軽石(1章)からはじまり、西表海底火山(2章)、北海道駒ヶ岳(6章)、福徳岡の場(7章)由来の軽石を中心に語りつないでいく。この間に、軽石に関わる用語(3章)、軽石の性質と判別法(5章)という、やや専門的な事項をかみ砕いて解説するコーナーも設けて広汎な読者層に対応している。更に、軽石の関連としてトピックス的に火山ガス(4章)、遺跡から出てくる軽石(9章)、さらに、著者の発見した材木状軽石(10章)が取り上げられ、マニアにも飽きさせない内容となっている。

一般の人には「価値のない代名詞」ともなっている「石」に残された情報から、大地の営みの変遷をひもとくことのおもしろさを啓蒙する、というのが本書のテーマなのかもしれない。啓蒙、といえば、京都大学の地球科学の伝道師、鎌田浩毅教授が有名である。彼の力強く華のある著作や活動を、京都にちなんで「鹿苑寺金閣」に例えるなら、本書および加藤祐三名誉教授は「慈照寺銀閣」にふさわしい、いぶし銀の輝きを持つ、といえる。

著者の、地球の営みに対する慈愛に満ちた姿勢、自然を科学するおもしろさが、上質のユーモアと語彙の豊富さに裏打ちされた言葉の端々から、読者にはごく自然に伝わってくるものと思う。

本書はいわゆる専門書ではないが、彼のライフワークの回顧録の意味合いもある。こうした著書を目にすると、とかく、世知辛い業績主義に流されがちな専門家、研究者たちにも「研究は楽しんでこそ、意味がある」という彼の科学者の良心が、沖縄の「なんくるないさ」的な清涼感を持って迫ってくるように思う。案外これは、将来を担う若い科学者にとっても重要なメッセージではないか。日常の研究に行き詰まったとき、本書を気楽に読まれることをぜひお勧めしたい。

先日天に召された(私にとっても、著者にとっても)恩師である、青木謙一郎先生が本書を読まれたら、どんな感想を持たれたのだろうか?と考えると。きっと、ニヤリとされて、こうおっしゃったのではないかと思う「いやあ、まったく、この本、いかにも加藤らしいよなあ…」と。

(264頁、定価税込2520円、2009年4月25日 八坂書房発行、ISBN978-4-89694-930-8)

* 〒310-8512 水戸市文京2-1-1
茨城大学理学部理学科
Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo, Mito, 310-8512,
Japan.
e-mail: fujinawa@mx.ibaraki.ac.jp